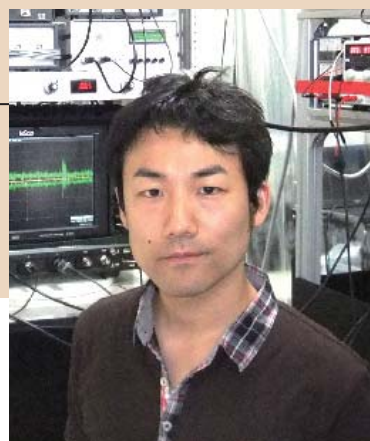




## 分子研を去るにあたり

**水瀬 賢太** 東京工業大学大学院 理工学研究科化学専攻 助教  
(前 光分子科学研究領域 助教)

## 「出所」にあたり



みずせ・けんた / 2006年東北大学理学部化学科卒、2011年東北大学大学院理学研究科博士課程修了、博士(理学)。2011年4月分子科学研究所 光分子科学研究領域大島G助教、2015年3月より現職。

2011年4月、日本中が震災でバタついているなか、分子研に着任し、以来3年11か月の間、楽しく苦しい分子研生活を満喫しました。光分子科学の皆さん、秘書の稲垣さん、装置を融通いただいたUVSORの皆様、転出の日まで無理を聞いてくださった装置開発室の皆様をはじめ、お世話になったすべての皆様に感謝いたします。

さて、「楽しく苦しい」と表現した分子研での生活を包み隠さず振り返ってみますと、私の着任時点で、前任者の退職後の数か月間放置され、動作が不穏になった装置群や、教授の着任時に大量購入した装置のメンテナンス警告やエラーの嵐を前に、分子研の研究者の流動性の弱点や、2代目以降の助教の苦労を痛感したものです。そのような苦労(今思えば些細な苦労)や、春には多くの節足動物が出入りし、梅雨時期には湿度90%を超えた地下実験室環境との格闘、「分子研は潤沢な資金があるのだから結果出せ」との他方からの世論も、研究者としての成長の糧にできたと考えております。

私にとって幸いだったことは、分子研には実験系研究者にとって最大の武器である装置開発室があったことです。

私の出身大学には分子研出身者や装置開発室のヘビーユーザーが多かったため、噂には聞いていましたが、実際に分子研に着任し、困った装置のトラブルシューティングから、思い描いた装置の設計製作、研究室の愚痴まで引き受けていただけるような厚いサポートのおかげで、どうにか研究を進めることができましたと思っています。水谷さんに「こんな部品思いつきました！できますか？」と相談にあがり、室員の方の時間とモチベーションが合えば、素晴らしいクオリティの製作品が1日かそこらで入手できます。分子研で発表したすべての論文・学会発表は、すべてMade in 分子研の装置で行い、装置設計を出しただけで招待講演の依頼をいただくこともあったことは、私にとって一つの誇りになっています。

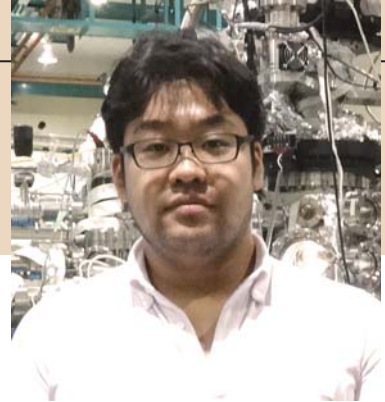
現在、東工大という、どうしても愚痴が出ざるをえない職場にありますが、優秀な学生がいることも事実であり、上司ともども、学生の力をのばせる授業を目指して準備に励んでおります。研究面では、分子研在任時に揃えた装置を大学の限られたスペースに配置するため、実験室設計からはじめる必要がありましたが、今、夏休み前の

時点で卒論学生用の1セットが立ち上がったところ(あと2.5セット)。今後は、異動前に間に合わせて作っていただいた装置の数々も用いて、これまでの分子研での研究を真の意味で発展(≠ただの延長)させ、分子科学に寄与していきます(公約)。今後ともよろしく願いいたします。

追記：分子研からの引越についての苦労話は資源研の酒井准教授が執筆されていまして、我々の引越風景を大島研HPに掲載するにとどめました。ご興味ありましたら検索ください。

**許斐 太郎** 高エネルギー加速器研究機構 加速器施設 第6系 特別助教  
(前 極端紫外光研究施設 助教)

## 分子研を去るにあたり



このみ・たろう／

2009年 名古屋大学 理学部 物理学科 卒業

2012年 総合研究大学院大学 高エネルギー加速器科学研究科 卒業 博士(理学)

2012年4月より分子科学研究所助教

2015年4月より現職

3年間の分子科学研究所UVSORでの研究生生活を終え、本年4月より高エネルギー加速器研究機構加速器研究施設に異動しました。分子研在任中は加藤政博教授をはじめ、UVSORの皆様、装置開発室の皆様、機器センターの皆様大変お世話になりました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。

今年の3月から高エネルギー加速器研究機構で実験を開始したため、あわ

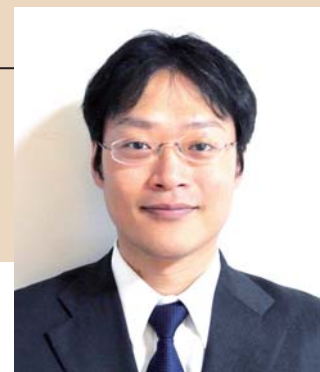
ただしい異動となり、関係者の皆様には大変ご迷惑をおかけしてしまい申し訳ありませんでした。7月に実験棟の装置類の引っ越しを行い、ようやく一段落つきました。UVSORの素晴らしさは、研究分野の異なる人が大勢集まる施設であり、他の研究を知ることのできる良い場所であることに尽きます。UVSOR恒例の施設前でのバーベキューパーティは、施設から研究系まで、そ

の時節に応じた諸外国の研究者から学生まで、幅広い人々の社交場となっており、UVSORならではの素晴らしい文化だと思います。

高エネ研ではエネルギー回収型次世代放射光源の研究開発をメインテーマとして行っています。この加速器開発ではUVSORで経験したことを大きな糧にしていきます。

**嘉治 寿彦** 東京農工大学大学院工学研究院先端物理工学研究部門 准教授  
(前 物質分子科学研究領域 分子機能研究部門 助教)

## 分子研を去るにあたり



かじ・としひこ／2002年東京大学理学部卒、2007年東京大学理学系研究科博士課程修了(博士(理学))、東北大学金属材料研究所産学官連携研究員を経て2008年9月より分子科学研究所助教、2014年12月より現職

分子研には、2008年9月の赴任以来、6年3ヵ月の間お世話になりました。思い返すとその間、平本先生をはじめ、分子研の方々、今は他所で活躍されているの方々、本当に多くの方々にお世話になりました。分子研を去るにあたり、決定から1か月と少しで異動したため、多くの方にご挨拶できなかったのが心残りです。改めて深く御礼申し上げます。

岡崎では公私ともに様々なことがありました。分子研に赴任したのは大雨の直後で、本当に引っ越せるのか東北大の人達から心配されたのを覚えています。大雨以外は、大学の同期の長坂君がいて、学部生の時に学生実験でお世話になった横山先生もいらっしゃるから不安は少なかったように思います。

最初は一人暮らしでしたが、その分研究時間はふんだんにあり、また、山手のハッピーアワーやUVSORのバーベキュー、様々な交流会に誘っていただき、研究所内外で多くの人達と飲み歩いたのを懐かしく思います。そのうち私も結婚し2人の子宝に恵まれ、同年代の人達も結婚したり、子供ができたりして、飲み会への参加自体は減っ

ていきましたけれども、今度はまた別の、家庭という共通の話題もできました。

研究においてはやはり、学部生時代から将来研究しようと心に決めていた有機薄膜太陽電池の研究を、そのパイオニアである平本先生のもとでできたこと、また、総研大のご支援により、もう一人のパイオニアであるC. W. Tang先生のもとへ派遣いただいたことは、どちらも他に代えることのできない大切な経験です。

現在、東京農工大学の物理システム工学科で、テニュアトラックの准教授

として研究室を立ち上げ中です。異動が決まってから、異動先の農工大の小金井キャンパスが、高校1年生の夏休みに体験入学で初めて大学の研究に接した場所であることを思い出し、不思議な縁を感じました。

時が経つのは早く、研究室の立ち上げに、初めての授業に、と取り組むうちに、4年生が4人配属され、週一コマ授業もするようになり、昨年11月に岡崎を離れた時にはまだ歩き始めたばかりだった1歳の息子も、もう、うさぐらいに走り回るようになり、言葉

も覚え、3歳の娘はもう私や妻の冗談をたしなめる程になりました。

そんな、どんどん過ぎる時に置いていかれぬよう、自らを省みる毎日ですが、学生が自分を踏み越えて大きく巣立っていけるような、それでいてより大きな研究成果を得られるような研究室を作っていきたいと思います。その中で分子研や、分子研で出会った人達とまた、関わらせていただくことができたら本当に嬉しいです。今後ともどうぞよろしく願いいたします。



## 外国人研究者の紹介

### Prof. Hyung J. Kim from Korea

この分子研レターズが出るころには、Carnegie Mellon 大学化学科のHyung J. Kim 教授が今年度2人目の客員教授として理論・計算領域に滞在予定である。Kim教授は韓国で修士課程を修了した後、液体論で著名なStony Brook大学のFriedman教授の下で学位をとり、Colorado大学のHynes教授のグループでのポスドクを経て、1992年からCarnegie Mellon 大学で研究を進めている。

Kim教授は、均一および不均一環境での溶媒和ダイナミクスや誘電緩和など化学反応や、それに関連する現象の理論研究を行っている。理論モデルとab initio計算、およびシミュレーションを用い、極性溶媒やイオン液体中の反応過程の自由エネルギーやダイナミクスの解析を行っており、イオン液体における超高速溶媒和ダイナミクスや誘電性質の温度依存性などについて研究を進めている。これら以外にも、界面、

制限空間、バルクの異なる環境下のイオン液体での化学反応、緩和過程、輸送現象などの現象の理論研究を行っている。さらに、イオン液体の応用としてのエネルギー貯蔵・変換などに関する研究も行っている。これらの研究により、2013年には韓国科学技術学術会議のFrontier Research Scientistにも選出されている。

Kim教授は家族思いの良い父親であり、旅行を趣味としているとのこと。分子研滞在中にはご夫妻で日本各地を訪問し、日本の様々な文化にも触れたいとのことである。Kim教授をお見かけすることがあれば、気軽に声をかけてあげてください。

(斉藤 真司 記)

